シャンフロ短編置き場

wanaza

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャンフロの男女ＣＰ詰め合わせです

主に楽玲と葉夏

主にＴｗｉｔｔｅｒにあげてたやつの詰合せです

ご都合展開や特殊設定もあるので、何でも許せる人向けです

目次

可憐／初日の出（葉夏蓮）――――1
街中キッシング／同棲ゴーイング（楽玲）――――8
春風モーニング／暴食アクアリウム（楽玲）――――13
闘争ビキニ（楽玲）――――17
いいこディスプレイ（楽玲）――――21
鈍感パンデミック――――25

可憐／初日の出（葉夏蓮）

◆可憐

個性というには、ちょっと特殊すぎる体質というものがある。

佐備夏蓮が知る限り最も奇妙な体質持ちなのは、

「……葉、また？」

「あ、ごめん。ちょっとそれ拾ってくれない？」

幼なじみの鹿尾野葉だ。その体質とは、

「ウツボカズラ……？」

「ゲームにそっくりなエネミーが出てきたんだよ。多分そのせい」

咲いた花がどこからともなく出現する、というものだ。原因は不明である。

幼なじみがこんな体質になったのは、いつだったか夏蓮は知らない。気づけば、葉はぽんぽんと花を咲かせていた。夏蓮は、そんな体質の幼なじみと過ごしていて困った記憶はないし、葉も葉で「別に夏蓮も嫌がらないし、このままで良いかなあ」と言って、この体質の原因を追及することなく高校生にまでなってしまったのだった。

「ウツボカズラって花咲くの？」

「さあ……？」
植物なら何でもオッケーなのだろうか。
「夏蓮」
「ん」
「ありがとう」
「私の方がお姉さんなんだから当然」
夏蓮は、胸を張って葉のお礼の言葉に応えた。今日だけ、彼のお姉さんになれる特別な日なのだ。葉は、そんな夏蓮を見てふわりと微笑んで。
ポンッと、花が出てきた。
「ありゃ」
「……葉、気が変わった。今日は無印の方に入る。早く準備して」
「え、ちょ、夏蓮!?あと、その花はこっちで片付けておくけど」
「いい。それよりも仕度。私は、今日自分の部屋から入る」
手早く床に落ちた花達を拾い集めて、夏蓮は部屋の扉を開ける。
「う、うん。じゃあ、また後で」
足早に玄関へと向かう。熱を持っている頬は、幸いにして幼なじみには見られなかっ

たはずだ。
夏蓮は、葉の幼なじみだ。彼の特殊体質にも、長らく接してきた訳なので、彼が咲かせる花に一貫性があるということも知っている。
例えば、家族と喧嘩したときはサボテンとか文字通り刺々しい植物を出現させるし、嬉しいことがあったときはかすみ草なんかを出現させていた。要するに、葉の感情に連動した花が出現するのだ。
ならば。
今夏蓮の手の中にある桃色の薔薇は――。
「葉のくせに生意気」
早く顔の熱が冷めればいいのに。
◆初日の出
初日の出は、大体朝の四時から五時に見ることができる。逆にいえば、ご来光を拝みたいのであれば、前日のつまり大晦日に徹夜する、あるいは山に登り始めたりする必要があるのだ。
1
非常に唐突だった。
「葉、山に行くから、準備して」

「ごめん夏蓮、何て言ったの？」
大晦日。例年通り、こたつで年を越そうと鹿尾野葉がぬくぬくとしていたら、こちらもいつも通りこたつに潜り込んできた幼馴染みに、突然いつもと違うことをいわれたのだ。
「なんか、山に行くって聞こえたんだけど」
「そう言った。だから、早く準備」
訳がわからない。だが、そう言われてみれば、彼女の服装がいつもよりも、防寒性能の高いものであるということに気づいた。
「葉遅すぎる。間に合わない」
「何に？というか、流石に説明が少なすぎるよ……」
「元日に山に登るなんて、初日の出以外理由は、ない」
そんなこともないんじゃないかな、という反論は口のなかに留めたが、ようやく幼馴染みの目的がはっきりした。はっきりはしたが。
「え、それ家のベランダじゃだめなの？」
「だめ。早く用意する。ハリーアップ！」

こうなった彼女は止まらない。葉はため息をつくと、立ち上がった。

2

幸いにも、日本一早くご来光を拝める山に行くことはなかった。葉と彼女が住んでいる地域からもっとも近い山に行くらしい。とはいえ、一番近いと言っても、それなりに距離があるわけで、徒歩は流石に辛い。ということで。

「夏蓮、タクシー使わない？」

「……仕方ない」

自宅から、5キロくらい歩いたところで断念し、お金にものを言わせる移動手段を使うことになった。

3

タクシーを使ったので、かなり早い時間に目的地に着いた。

葉達の様な、初日の出見物客のためにロープーウェーは運転するようだが、その運行開始時刻まで30分程ある。

どこかで時間を潰すかと思っていると、彼女はさっさと登山口の方に向かっていく。

「ちょ、夏蓮どこに行くの？」

「歩いて登る」

「やめといた方が良いんじゃないかな……」

「葉、考えて。私たちはタクシーで余計な出費をした」
「あー……」
「ここで、ロープーウェーを使うと、帰りの電車賃が心もとない」
残念ながら、彼女の言うことに一理あった。
「ほら、葉歩く」
「わかったよ……」

4

山道は、それなりに整備されていて、歩きやすかった。だが、彼女はそこまで体力に自信があるわけではなく。
「葉今九合目？」
「まだ、三合目くらいじゃないかな……」
数分ごとに、九合目を連呼するようになってしまった。
「葉荷物持って」
「はいはい」
「葉、引っ張って」

「仕方ないなぁ……」
「葉、おんぶ」
「今本当に九合目だから頑張ろうよ……」
そして、ついに頂上に着いた。

5

空は白み始めている。
葉達が頂上に到着して、ほんの少ししてから、今年一番新しい太陽がやってきた。
見物達は歓声を上げ、葉達も例にもれなかった。
きゅっと葉の手に、彼女の手が絡む。
「どう?」
彼女は、何故かどや顔だ。
「うん、きれいだ」
「これを、葉と見たかった」
叶わないなと、葉は思う。幼馴染みのこういうところが、本当に。
「夏蓮、ありがとう」
「どういたしまして」
今年最初の光が、二人を照らした。

街中キッシング／同棲ゴーイング（楽玲）

◆街中キッシング

『陽務が、あの斎賀さんと、どんな話してんの？』とは、俺と玲さんが付き合いはじめた時に、雑ピに質問された言葉だ。

その時は、即座にやつの新作ポエム（最近は和歌にも手を出し始めたらしい）を、きっちり詠み上げてうやむやにしたけど、あの質問に答えるとしたら「ごく普通」としか返せない。

普通に手を繋ごうとして玲さんがバグモードになって、普通にデート先でなぜかカリスマモデルと長身ジャージ女（両者申し訳程度のグラサン着用）が出現して、普通に徘徊型ラスボス（リアル人間）と遭遇して、といった風にごくごく普通のお付き合いの経過を辿っている。

普通ってなんだっけ。

で、世のカップルと変わらないように、ごくごく普通にそういう触れあいもだんだんとするように、というか出来るようになって。

自然と、取り決めみたいなものも出来た。

くいっと、袖を一回引かれる。
夕方からぼちぼち夜に名前を変える時間。
辺りに人通りは少ない。
もう一度、袖を引かれる。
俺達は、一応周囲を確認して、それから道の端へ。
「玲さん」
こくんと、うなずきが返ってくる。
俺はそっと玲さんの肩に手をまわす。
俺と玲さんの身長差は１５ｃｍ。
誰が言い出したのかは、分からないが、理想的な身長差らしい。
「らくろうくん」
玲さんの手が俺の頬に添えられる。
フェザーキス。
軽く触れるだけ。
いっかい。
にかい。
背中をとんとんと、叩かれる。

合図だ。
フレンチキス。
恋人同士のキス。
お互いの熱がより、伝わる。
「ふ……ん……ん」
頬に添えられていた玲さんの手が、いつしか俺の首筋に降りてきている。
俺も玲さんも夢中になっていた。角度がかわる。
「ふぅぅぅ……ん……ぁ……」
腰にまわした手に、力が入る。
首筋にまわされた手に力がこもってきているのが分かる。
もっとふかく。
もっとふかく。
ぴったりとひっついて。

「最大火力と最大速度は、現実世界でも最大火力で最大速度なのか？」
「ひゃぁぁぁぁぁ!?」
「さ、斎賀姉え!?」

「老婆心だが、あえて言わせてもらおう。　路上だぞ？」
ころしてください。

◆同棲ゴーイング

「……相当にまずい気がする」
気がする、じゃなくてまずいんだが。
まずいといっても、別に料理がまずいとかそういうわけではないし、というか作り置きしてくれているのは玲さんだから当然美味しい。
「美味しいから、問題かもしれない」
美味しいことの何が問題か。
一般に、胃袋をつかむという言葉がある。要するに、旨い料理はアドということなんだが、旨いピザだと留学の危険がある。いや、ねえよ。
かくいう俺は、既に玲さんに胃袋をつかまれてしまっている状態と言えるんだが。
「毎週末に……うちにきてくれて……料理作り置きしてくれて……」
ちらっと、ワンルームマンション特有のキッチンに目をやると、玲さん用の食器とかまで揃いつつある。
洗面所には、歯ブラシとかスキンケア用品とかまでしっかり備え付けられるように

なっていて。
「……どうせい」
厳密には、半同棲とか言うやつ。そして、最近は週の半分以上玲さんが、うちに来てくれている。
このことから、導かれることはひとつ。
「筋、通さないと……俺、やばくね……？」
「何がですか？」
あ、玲さん、来てくれてたんだ。
いや、ちょっとね、玲さんにプロポーズというか、結婚というか、婚約というか、ご実家に挨拶しとかないと俺の命が。
「……けっ!?」
「け!?」
玲さんいつの間に!?!?
後日、めちゃくちゃ娘さんを下さいするために、風雲斎賀城にのりのんだ。

春風モーニング／暴食アクアリウム（楽玲）

◆春風モーニング

ひんやりとした空気を肌で感じて、斎賀玲は目を覚ます。カーテンが大きくたなびいて、風が吹き込んで、それと同時に朝がきたことを玲に知らせる。

（そうだった）

日中の気温もだんだんと高くなってきていて、すっかり寝室にも熱がこもるようになってしまった。だから昨夜は、窓を開けて眠ろう、と恋人と話をしたのだった。

玲はごろんと寝返りをうつ。すぐそばに、彼の顔があった。

そういう関係になって、そういうことをするようになって。共に暮らすようになった。

だから、この関係性になってすぐの頃と違って、恋人の――陽務楽郎の顔がすぐ近くにあっても、じっくり鑑賞できる程度の余裕ができてきた。

（まつげに、ほこりがついてる）

そっと手を触れる。慎重に慎重に手を近づける。

その時に、ふわりと大きく風が吹き込んできた。

ピクリと、楽郎の目蓋が震える。
ゆっくりと、彼の目が開いていく。
「おはようございます、楽郎君」
「おはよ、玲さん」
まだまだ眠たそうな声。
コツンと、額がぶつかってくる。
「どうしました？」
「んー、幸せだなって」
「ぴょっ!?」
◆暴食アクアリウム
※モブ視点
私は今、水族館にいるんだけど。
「れい――、これ食べたことある？」
「クマノミは流石に……。　もしかして……らく――君はあるんですか……？」
「ある」
さっきから、隣から聞こえてくるカップルの会話が物騒過ぎる。
いや、別に物騒ということはなくて単にお魚さんを食べたことがあるかどうかとい

う、一般日本人ならば誰しもする会話ではあるのだけれど。場所が場所なので、お魚さんにとっては相当に恐ろしい話題だろう、多分。

「あ、でもこっちは、昔――」

熱帯の海、と書かれたコーナーなので泳いでいるお魚さん達はかなり幻想的だ。

ただ、隣のカップルが幻想を破壊というか食し尽くしてるだけで。

カノジョさんの方――多分デートだろうからカノジョであってると思うけど――が指したのは、青色のお魚さん。映画にもなっていたことがある、このコーナーでも人気の魚だ。壁の説明文には、観賞用として人気、と書いてあった。

「祖父が目の前で捌いて泣いたことは覚えています」

祖父ぅ！ド〇ーさんを幼子の前で捌いたのか。

「あー、やっぱりあったんだそういうの」

「――ろう君も？」

「親――がタツノオトシゴを目の前でカラリと」

「魚って、フライになればおいしくいただけますよね……」

どういう家庭で育ったのこの二人。

ある意味でお似合いなのだろうけど。

名も知らぬカップルは、一言二言交わしてから、別の展示へと向かっていった。

心なしかお魚さん達も、あの二人が去ってから生き生きとしてる気がする。あっ、跳ねた。

偶然、本当に偶然なんだけど。もう一度、あの暴食カップルに遭遇した。場所は、この水族館の売りでもある、マナティーの展示コーナーで。

先程のように、仲良くお話ししているのだが。

いやいや、まさかね、まさかマナティーまで食べたことあるなんてことは。

闘争ビキニ（楽玲）

「ここは私が押さえる。だから、玲。お前は私に任せて先にいけ」
「そんな百姉さん！」
「もがががが」
「いいから早く行け。そう長くは持たない。頼む玲、お前があれを封印するんだ！」
「もがーもがーーーー！」
「分かりました。　私が――仙姉さんの保管してるあれらを全て封印します」

斎賀さん家は、初っぱなからクライマックスだった。
「いや、どういう状況だよこれ」
少し頭を整理しよう。俺こと、陽務楽郎は恋人たる斎賀玲さんのお家に招かれた。これはいい。そんなしょっちゅう、彼女の実家に招かれることがあるのか、という疑問はとっくに消去した。で、例のごとくお手伝いさんに、『こちらでお待ちください』されたら、なんか無駄に高度な争い――いや、多分内容はすげえ低レベルな気がしてるんだけど――が繰り広げられていた。

すげえや玲さん、走るときにも頭が全くぶれないんだ（現実逃避）
そして、どうしよう。頭を整理しても何がどうなってるか全く理解できない。誰か説明してほしい。
「聞こえますか婿殿――」
「婿じゃ（まだ）ないです」
こいつ、直接脳に!?と一瞬思ったが、そんなことはなく、単にずるずると人一人引きずっているだけの、座敷わら……仙さんだった。え、引きずられてる次女たる百さんはどんな感情なの今。
「義弟殿。これは他意はない話なのですが」
「聞きたくないです」
このタイミングでの話しなんて、絶対にろくでもない内容しかあり得ねえだろ。
「殿方はビキニに目が無いと伺いました」
「誰から聞いたんだよそんなもん」
「夫です」
聞くんじゃなかったよ。誰だよ聞いたの。俺だよ。
「ということで」
「俺、めっちゃ帰りたいんですけど」

「何がとはいいませんが、玲の写真は」
「あっ、要らないです」
本人の同意無しは、普通にアウトだよ。
大体、見たかったら自力で頭下げて「見せてもらうし」
「――」（唐突に鼻血を垂らす長女）
「え」
「隙を見せたな」
ぐるりと円を書くように、下世ワラシが床に倒れた。即座に反撃のため、起き上がろうとしたのだろうが、そこを許すような斎賀（次女）ではなかったらしい。俺は何を言ってるんだろうか。
「ぐえ……っ」
「ええ……」
ええ……。
「まあ、なんだ。節度がある関係性なようで、安心した。後は私が処理するから、ゆっくり過ごしてくれ」
「処理て……」
今度は百さんが、長女を引きずって部屋から去っていった。

俺は考えることを止めた。
「お、お待たせしました楽郎君。そ、その、ゆ、ゆゆゆゆうはんも」
「夕飯？」
「はい。今晩は、鰹のたたきです」
玲さんの目はやけに澄んでいた。
「じゃあ、ご一緒しようかな」
「はい」

燃料が藁かどうかの確認はしなかった。

いいこディスプレイ（楽玲）

「イイコちゃんだよなあ」
「はあ？」
移動教室で通りがかった教室の前で、偶然遭遇した恋人こと、斎賀玲さんとのやりとりを一通り見ていた雑菌福耳ピアス野郎が、ワケがわからんことを言い出した。
「誰が」
「お前だよ、お前。最も爆殺したい男ランキング一位の陽務楽郎のことだよ」
「なんだよそのランキング」
こんなにも品行方正に生きてるのに、爆殺される謂れはない。あっち、というか幕末なら話は別だが。そういえば、最近新しい三次元屈折天誅っていうのが開発されたって、京極の奴が言ってたなあ。三次元屈折ってどういうことだよ。幕末物理学会に顔をそろそろ出すべきか。
「逆に聞くけど、斎賀さんと付き合って、恨まれないとでも思うのか？」
「そんなこと言われても」
確かに。玲さんが、モテることは知っている。元々から、そうなんだろうな、という

ことは気づいてはいたけど、お付き合い――つまるところ、彼氏と呼ばれる存在になってから、そのことがよくよくわかるようになった。具体的にはお付き合いをしていてなお、告白されているらしい。

つまりだ。

「天誅、するか」

「なに考えてんのお前?!」

なにってあれだよ、あれ。

不埒な輩は、しっかり誅しないといけないって、金魚鉢の鮫アヴェンジャーズ達が実証してたしな……って、いてえ!

「なにすんだよこら」

「こっちの台詞だよ。焦点あってねえし、二十七分割とか意味がわからないことを、いきなり呟くな!」

声になってたか。それもこれも、俺じゃなく天が悪いし、今の状況ではイイコちゃんとか言い出した雑ピが悪い。そこで、ようやく思い出した。

「それで、なんで俺がイイコちゃんになるんだよ」

「話ちゃんと戻るのか……」

なぜか呆れた顔になる雑ピ。お前が言い出したんだろうが。

「自覚ねえの？」
「自覚？」
　言われても、身に覚えがない。
「陽務は、そういう奴だよなあ」
　雑ピが露骨にため息をついた。
　ムカついたので雑菌アクセサリーを引っ張る。
「やめほよ！　ひょういふとこだぞほ前！　絶対、斎賀さんの前でそんなことしねえじゃん！」
「当たり前だろ」
　玲さんは、こんなことをせざるを得ないようなことしないし。
「この際だから言うけど、お前斎賀さんと話してるとき、ワントーン声が高くなってるし、口調も違うからな」
「え？」
　そうなの？そんなはずは。
「陽務が斎賀さんの前であからまさに様子が違うと思う人ーー！」
　いつの間にか、教室についていたらしい。合流したクラスメイト達が、何事かといった様子で雑ピのことを見て、説明を受けたら、少なくともその場の全員が手を上げた。

「ええ……」
「あからさまだよね」
「恋ってすごいなって思うよね」
「玲ちゃんは言わずもがなだけど、陽務も明らかに目が開くし。　しゃべってる時って」
「「コロセ……コロセ……」」
「「「「コロセ……コロセ……コロス……コロス」」」
　生暖かい目が、非常にいたたまれない。
「「ハリツケ……ハリツケ!!!」」
　そのせいか、浮遊感まで覚えて……ちげえわ！これに関しては、本当に俺が持ち上げられてる！
「離せテメーらあああああ！」
「裁判やろうぜ」
「じゃあ俺、死刑執行人やる」
「じゃあ俺、電気椅子持ってくる」
「竹でできたノコギリ作ってくる」
「いやじゃあああああ！」

鈍感パンデミック

「最近、楽郎君が、付き合って欲しいってすぐに言うようになってきて、勘違いしないようにするのが大変なんです」

常連客である斎賀玲のその言葉を聞いて、ロックロール店主岩巻真奈は頭痛の気配を覚えて思わず米神を押さえる。

「真奈さん大丈夫ですか!?」

「大丈夫か、大丈夫じゃないかで言えば、大丈夫じゃないけど、もう少し詳しく教えてくれる?」

心配そうな表情で顔を覗き込んでくる常連客に、再度催促する。するとようやく、玲は詳細を話し始めた。

◆

よく晴れた日だ。

ここ最近はどうやら日本列島全体を高気圧が覆っているそうで、まさに通学日和である。

今日の玲の勘働きは冴えに冴えていて、想い人である陽務楽郎とも一緒に登校するこ

とができた。
（ここ最近、調子が良い気がする……！）
「玲さん」
「ほぴゅ」
「ほぴゅ？」
　しまった。少し油断してしまっていた。
「な、なんでも、ないです！」
「そっかあ」
　へにゃりと彼が笑う。玲はその表情を見て、自分の顔がかなり熱くなっている自覚をした。
（最近の楽郎君は、少し、変かも）
　今みたいに、笑うことが増えた。
「ところで、玲さん」
「ひょあい！」
　そして、まさに今のように玲に向かってはにかみながら、話しかけてくることも増えた。後、心なしか。
（顔が赤くなってる、ことが多い気がする）

「玲さん、付き合って欲しい」

み。

しばし、思考停止。しかし数多の修羅場を乗り越えてきた玲には死角はない。

「今晩も、シャンフロですか？　良いですよ」

加えて、こんな感じの発言も多くなっている。玲が勘違いしたらどうするつもりなのだろうか。

「……うん、シャンフロ」

そして、最後にがっかりしたような、安心したような複雑な表情になることも増えている。

◆

「ということなんです、真奈さん」

常連客の語りを聴いていて、真奈はなんかこう、涙が流れそうになってきた。

「楽郎君……哀れがすぎる……」

「や、やっぱり、楽郎君は何か困っている事があるんですか!?」

そして、こっちの常連はやっぱり分かっていない。

ここで、真奈が端的に『告白されてんのよそれ』と答えることもできる。できるのだが、それはオトナとしてやってはいけないことだし、若干あのクソゲーハンターが自分で撒いた種でもあるのは間違い無いとも、思わなくもない。クソボケが感染してるし。

つまり、真奈にできるアドバイスは、一つしかなかった。

「玲ちゃん」

「はい」

「楽郎君にチューしなさい明日にでも」

「真奈さん!?」